大月分校の閉校を惜しむ

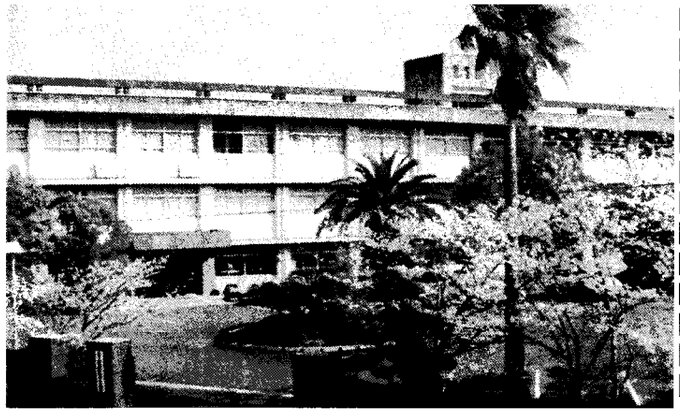
山下　博史

大月分校は1960年4月20日高知県立幡多農業高等学校大月分校（昼間定時制）として開校し、1974年4月からは宿毛高校大月分校（全日制普通科）として再発足したが、この3月末で53年間の歴史に幕を下ろした。これで県下の3つの分校がなくなったことになります。

大月分校が閉校したことは非常に残念なことですが、児童生徒数の減少、立地条件（宿毛まで車で15分）、地元中学校からの入学生の減少などを考えると、やむを得ないことのように思います。ただ、ここ6～7年は不登校や発達障害などの問題を抱えた生徒を積極的に受け入れ、小規模校の特性を生かした対応をしてきました。教員の力が及ばないケースもありましたが、分校に来ることによって高校生活を送ることができた子どもたちも多くいます。また、教職員にとってもそういった子どもたちと関わり、援助していくことに教職員としての誇りを抱くようになったことも事実です。昔から教師は「子どもに学べ、子どもによって育てられる。」と言われていましたが、まさに、大月分校での10年間の教員生活は子どもたちとの格闘であり、子どもたちから育てられた日々でした。少人数の教育がすべていいわけではありませんが、様々な問題を抱えた生徒にとっては、小規模校での教育環境が彼らの特性や傷ついた心をいやすのには適した場所であったように思います。

大月分校ではこの1年間、閉校のための準備をしてきました。昨年の5月上旬から8月下旬まで、3回にわたって蚕を育て繭団扇400本と繭人形700体を半年かけて作りました。地域の方々の協力を得て生徒・教職員が力を合わせて作り上げた繭団扇と繭人形を、閉校記念品として閉校式に参加してくださった方や地域で協力してくださった方々にお渡しすることができました。

この手作りの記念品がこれまでの大月分校の歴史を物語っているように思います。地域運動によって誕生した大月分校、決しては派手ではありませんが、地域に根差した学校であったように思います。卒業生や分校にかかわった教職員にとって、閉校は大変悲しく寂しいものですが、分校での様々な思い出がたくさんあります。これからもその思いを大切にしていきたいと思いますし、卒業記念に植えた金木犀・銀木犀が咲くころには1度訪れたいと思います。



大月分校校舎

退職者からのメッセージ

※この一文は、4月26日の退職者を励ます会でのメッセージを転載したものです。

本日は出席できず申し訳ありません。このメッセージが読まれる頃は、減殺、私が生活している学生寮の歓迎バーベキュー・パーティーで、ウーロン茶もしくは、ビールを飲んでいると思います。

私は、47才で退職しました。理由は、「網膜色素変性症」という網膜が痛む病気のために目が不自由となり、文字を読んだり書いたりすることや、高校教員として仕事をすることに困難が生じるようになったためです。

中学校の頃に眼科医から「将来は視力を失う可能性があります」と言われていましたが、この年まで教員として、また高教組組合員として仕事ができたことを感謝すると共に、皆様のご支援、ご協力に心からお礼申し上げます。

アメリカで対日政策を学びたい

吉岡　太史

さて、退職後の生活についてですが、私はこの4月NIC・インターナショナルカレッジ・イン・ジャパン大阪校に入学しました。先月、入学式とクラス分けテストを終えたところです。この学校では、海外の大学に正規留学することを目的に、英語を鍛え、大学の教養課程の一部を学習します。授業は、ネイティブの先生により英語で行われます。NICでの学校生活は、来年の4月まで続きます。英語能力の不十分さと、目の不自由な私ですが、チャンスがあればアメリカに渡り、アメリカの対日政策、対東アジア政策について学びたいという夢を持っています。そして、幅広い世界観を身につけ、私なりに日本の立ち位置を捉え直してみたいと思っています。

高教組と高退協の皆様がそれぞれに事情を抱え、また若い皆さんが夢を持って仕事に励んでおられる中にあって、教育現場の一線から退くことにふがいなさとさみしさを感じますが、新しい人生において、まずは目の前のやるべきことに、前向きに精一杯取り組んでいきたいと思っています。

高教組、高退協の皆様のご健康とご活躍を心よりお祈りします。

退職して1か月が経ちました。4月1日はさすがに早く目が覚め、出勤しない自分を不思議に感じながら落ち着かない1日を過ごしましたが、翌日からはすっかり馴染んでいます。

この1か月間、「晴耕雨読」ならぬ「晴運雨だらだら」の日々を過ごしています。晴れた日には91歳の父を隣に乗せて、桜や新緑を求めてドライブし、雨の日は読書もしましたが、主にダラダラ、グダグダ・・・。

父は車で出かけるのが好きで、スーパーへ買い物に行く時も必ず「わしも行く」とついてきます。「えい天気じゃのう。」ということばを聞くと、正直私はぞおっとします。それでも1か月で走行距離は2000キロを優に超えました。東西の海岸線を走ったり、四万十川や新庄川、仁淀川、物部川沿いを上ったり下ったり。山も田んぼやはた畑も、川も海も本当にきれいです。ジープ型の軽自動車で狭い道や多少の悪路も何のそのと走っていますが、中には崩落危険箇所や急勾配国道のマークがついた道が多く、運転の苦手な私は苦労することも度々です。

「土佐の山間や海岸を運転して」

生野　幸

美しい土佐の山間や海岸を走りながら、平野や広い砂浜が少ないことに改めて気づきます。川に沿って曲がりくねった細い道が多く、海岸線は山からいきなり海へと断崖絶壁になっています。だからこそ絶景ではあるのですが。また、私の住んでいる地域もそうですが、集落によっては人影が少なく、空き家となった家、放置された田畑が目につき、過疎化・限界集落ということばが現実味を帯びてきます。

これからの高知県はどうなるのかという不安、また地震が起きたら道路がいたる所で寸断され、ほとんどの地域が孤立してしまう、それどころか、仮に今地震が起きたらこの岩の下に埋もれてしまうのではないかという恐怖を体感しつつ、親孝行な私は今日も国道という名の酷道を走っています。

窪田充治さん ありがとう

日時　6月7日（土）10:30～13:30

場所　南国市前浜公民館

会費　2000円（お弁当と写真代含む）

締切　5月29日（木）

高教組書記局まで

俳句

2月15日（土）
当季雑詠
合田　青幹

晩鐘の余韻嫋々日脚伸ぶ
大土佐の春は海より南より

吉本　伸秋

風澄むや糸に虚空の凧の声
狛犬の眼に隠りたる余寒かな

小笠原さちを

冴返る梅は盛りを保ちつつ
やらひたる豆踏み潰す朝の門

3月15日（土）
須崎市　桑田山
合田　青幹

借景は紺碧の空寒桜
去来せる心に仰ぐ寒桜

小笠原さちを

隧道を幾つ抜け来し木の芽晴
蜜蜂の羽音と化せり花菜畑
・・・・・・・・・・・・・・・

187号の俳句を一句
次のように訂正します

吉本　伸秋

つんゝと木の芽尖るや
寒の入り

機関誌こうたいきょう第３４号の修正記事です。
ｐ５２（１）群の例についての補足
各矢印の番号は、すべて左端の図を基準とした回転移動です。
土居　康男

短歌

教え子
山本晶子

ぷっつりと教え子からの賀状
絶ゆ会社倒産せしにやあらん

離婚して軽やかに生くる教え
子よ赤きダンス靴縦横に舞う

やや卑猥な女形となりて忘年
会沸かす教え子添乗員なり

哀惜　歌人千頭泰さん
榊原忠彦

歌と本、映画にエッセイと癒
しくれぬ逸材にはかにこの世
を去りぬ（去る二月二七日没、八八歳）

国見師が「凝り性」と評せし
千頭さん、「戦中映画鎮魂譜」
を賜ひ吾が友となる

筆まめの手紙に添へられしプ
ロマイド荒寛の「天狗」いつ
か十枚

7年間役員として お世話になりました

梶原　詳三

主に機関誌こうたいきょうの編集委員の仕事をさせて貰いましたが、失敗やミスでご迷惑を掛けました。

時の話題が次々あって「勤評５０年」「地域で輝く」「東日本大震災」「憲法問題」など特集には力作、大作が寄せられ、まとめることができました。

原稿も常に時代をリードする先輩達が世界情勢を考えながら投稿して頂き、随分助けられました。関係の方々に感謝を申し上げます。

私が比較的苦労したのは、追悼文の執筆者を見つけることでした。長生きされる方が多く故人を知る人の層や数が少なく、また高齢のため思い出さないなど困難が多くありました。どんな少ない関わりをも大事に、複数の方々の協力も得て、家族の協力も貰って書きあげたこともありました。それだけに仕上がった時の喜びも大きいものがありました。

それらを通じて、高退協の連帯や絆の強さを痛感しました。

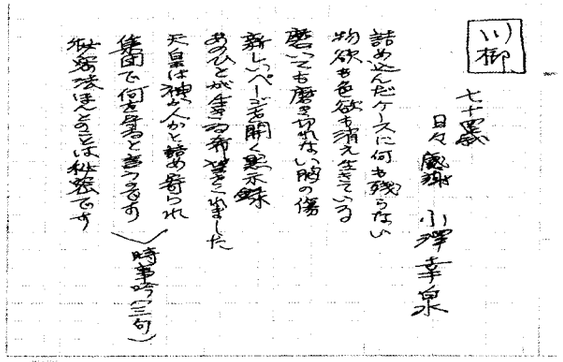
高退協の活動は組織にしばられてウルサイと感じる人もありますが、好きな活動だけ参加すれば良く、イヤなら不参加でも誰も文句は言いません。会えば昔話に花が咲きまた元気になります。気楽に参加しましょう。

消費税増税
叶岡淑子

本体価格やけに目につくスーパーのレジにて驚く今日より増税

ポイント増、二個組み売りとあの手この手中小業者の悲鳴と聞こゆ

「もう無理！」のシールびっしり投票板　市民の怒り届け為政者へ



飲水思源

「どうするか」までつかんでこそ

横田　慧

昨年の夏、岡崎昭平さんより「たらこ検査のおもいで」というDVDをいただきました。小津高校化学クラブで、タラコ、ソーセージの食品添加物を検査したものです。市販のタラコなどには、赤く発色させるための亜硝酸塩が添加されていて、これが発ガン物質ニトロソアミン生成につながることをつきとめたのです。そしてそのあとがだいじです。県厚生労働部などの関係機関、新聞社にはたらきかけて、亜硝酸塩の添加を止めるように、粘り強く活動しています。科学のしごとは、もちろんあることの原因を突きとめることですが、「なにか、なぜか」にとどめず、「どうするか」まで進めてこそ、研究の価値があります。ヘーゲルは、そうしたものを真の認識、概念、理念とよびました。概念といえば、たくさんの同種のものを抽象、概括したものというのが常識ですが、ヘーゲルでは、あるべきものをつきとめるまで進んでこそ概念なのです。だから、ヘーゲルの概念は、実現しないではおかないというものです。

「どうするか」までつかんだ人をもう一人、わたしは思い出します。二〇数年まえに、高校教育研・現代社会部会に講師としてお招きした「川の外科医」故福留脩文さんです。福留さんは、足繁くスイスに通い、学び、河川のコンクリート張りをもとの自然な姿にとりもどす、近自然工法を使命としている方でした。スイスでも川のコンクリート張りの時代があったようです。幅の狭い深い川の両岸に高いフェンスを張り巡らした写真がとても印象的でした。それが改修され、両岸が緩やかな斜面をなし、川底を清らかな水が流れるよう生まれ変わった姿に、感嘆の声が会場に広がりました。

このときのお話しで、福留さんが多くの時間をさいたのは、浅瀬があり、深いところもある自然な川、曲がった岸は、水中生物や昆虫を喜ばせ、結局は人間のためにもなる、ということわりでした。四万十川の清流も、無数の昆虫が水中で生活したあと、空中に飛び立つことで、清らかな水にしてくれているそうです。

福留さんの「どうするか」は、ほんものの河川を改修するのですから、たいへんですが、日本じゅうを変えてみせるという情熱にあふれていました。

「高知新聞」が、二〇〇九年の二月から十一月にかけて、この福留さんの仕事ぶりを、「川の外科医が行く」五十二回のシリーズものに組みました。この切り抜きは私の宝物になっています。